シリーズ

西淀川記憶あつめ隊

Vol.9

西淀川区は繰り返し大きな水害に見舞われてきました。災害時は多くの困難が生じ、様々な人々の助け合いが起こります。今回は、第二室戸台風の助け合いをきっかけにして結婚された樋口和恵さんのお話です。

樋口和恵さん

樋口 和恵さん

2014年1月20日
聞き取り

会社で、今も竹島に工場があります。

和恵さんは、母、弟妹3人と共に御幣島の長屋の二階に住んでいました。第二室戸台風が大阪に上陸した9月16日(土)、和恵さんは工場に仕事に行っていました。通常時は土曜日も一日仕事でしたが、台風が来るということでお昼頃一斉に退社しました。

同じ会社の樋口さん(7歳年上の24歳。後の旦那さん)は大野百島に住んでいて方向が一緒だということで、家まで送ってくれたそうです。その頃は特に親しいわけでもなく、帰宅する方向が一緒なので、心配して送ってくれたそうです。

◆第二室戸台風で窓が破損

第二室戸台風が大阪を襲った昭和36年(1961年)の当時、和恵さんは17歳、淀中学校を卒業して竹島にある新家工業の工場で働いていました。新家工業は高級自転車のツバメ自転車や自転車のリムを製造する樋口さんが家の入口まで送ってきてくれたところ、「バン」と二階で音が聞こえました。急いで二階に上がってみると、東側の台所の小さな窓が風で割れていました。そこで樋口さんが手際よく割れた窓に板をうちつけてくれたそうです。

その直後、風の向きが代わり、大きな窓も割れそうになったそうです。窓が割れてしまうと、家の中に風が舞い込んで屋根が飛んでしまいます。そこで、樋口さんが素早く畳をあげて窓にたてかけて抑えてくれました。樋口さんは「母と弟には押し入れに入るように」といい、残りの4人で畳を抑えて風が収まるのを待っていました。

国道2号付近の浸水

◆浸水のために帰宅ができず

夜が暮れて風がおさまり、樋口さんは自宅に帰ろうとしましたが、階段の途中まで浸水していました。仕方がないので、そのまま2日間ぐらい和恵さん宅にいたそうです。

台風の翌日か翌々日に、新谷工業がいかだでおにぎりを届けにきてくれたそうです。

和恵さんと樋口さんが窓から顔を出すと、職場の人が「樋口さんがどうしてここにいるのか」と驚いたそうです。

樋口さんは水が腰の高さぐらいまでひいた時に、水に浸かりながら大野の家まで帰りました。樋口さんの実家も床上浸水していて大変だったようです。

◆災害が取り持つ縁

第二室戸台風で助けに来てくれたのをきっかけに、樋口さんと和恵さん宅は家ぐるみのお付き合いが始まりました。台風の件があるため、和恵さんの母も樋口さんをたよりにしていたそうです。第二室戸台風から5年後に2人は結婚したそうです。

樋口さんは小さいときから台風に慣れており、どのように台風に対処すればよいかよく知っていたそうです。だから、和恵さん宅で機敏に行動することができたのではないかとのことです。

災害への対処方法をよく知っていることは大事です。そしてそれはいざという時に自分だけでなく周りの人を助けることができますし、それをきっかけに生涯に繋がる縁に発展することもあるんだなあと感動しました。

谷内久美子
(日本学術振興会特別研究員)

【第二室戸台風による西淀川の被害】

第2室戸台風は、昭和36年(1961年)9月16日に大阪を襲った台風です。大阪湾の高潮O.P.+4.1メートルに達し、市内は西大阪を中心に全半壊流失1,726戸、死者6人、負傷者682人におよびました。西淀川区では神崎川が氾濫して大和田・出来島・御幣島では家屋のほとんどが床上浸水の被害を受けました。

災害に備えるためには、過去の災害の体験を後世に伝えていく必要があります。そのため、現在、あおぞら財団では、ジェーン台風、第二室戸台風の記憶の掘り起こしをしています。お話を聞かせていただける方は、お気軽にあおぞら財団(06-6475-8885)までご連絡ください。。

※この活動は公益財団法人JR西日本あんしん社会財団の助成でおこなっています。